高齢夫婦の結婚満足度とエゴグラムとの関連
Ego states and marital satisfaction of Japanese older couples

日下　倫子
（桜美林大学）
長田　久雄
（桜美林大学大学院老年学研究科）

要旨

本研究は，高齢夫婦の結婚満足度とego-stateとの関連を明らかにすることを目的としている．ego-stateの評価には，質問紙形式のエゴグラム（egogram）を用いた．対象は，筆者らのネットワークを利用して協力が得られた夫婦であり，questionnaireと半構造化面接を実施した．分析対象は45組90人であり，年齢は59歳から91歳（67.8 ± 6.3歳），結婚継続年数は10年から60年（40.1 ± 8.8年）であった．結婚満足度の平均は，夫が21.7 ± 3.8，妻が20.8 ± 4.9であった．結婚満足度は，ego-state 5領域のうち養育的な親（r=.40，p<.01），自由な子ども（r=.33，p<.01），大人（r=.22，p<.05）3領域との間に有意な相関が認められた．ego-stateは自己トレーニングで変容可能であることから，トレーニング・プログラムなどを支援することにより，高齢夫婦が自力で結婚満足度を高める可能性が示唆される．

キーワード：結婚満足度，ego-state，エゴグラム，高齢夫婦

1. 緒言

結婚満足度（註）については，結婚当初をピークとして経年と共に下降し，高齢期に再上昇するとする『結婚満足度のU字カーブ説』[1,2,3]が長く一般的であった．結婚満足度が高齢期において再上昇する説明としては，① 高齢期においては大多数の夫婦が仕事や育児のストレスから開放されていること，② 高齢になるほど自分たちの人生を肯定したい気持ちが強いこと[4]が挙げられている．しかし近年の離婚率の上昇を背景として，結婚満足度の再上昇の説明としては，離脱効果説[5,6]が主流となってきた．つまり不満足夫婦は離婚して調査対象から外れ，比較的結婚満足度の高い夫婦のみが結婚を継続し調査対象に残るからことから，高齢夫婦の結婚満足度が高くなるという説である．日本においても離婚率の上昇が指摘されているが，それは25歳から39歳までの若い世代に顕著な現象であり，離婚率そのものは諸外国と比して低い[7]．

では，離婚が少なく離脱効果が顕著でないとなれば，日本人高齢夫婦の結婚満足度は低いま

ま推移するのであろうか．先行文献には，その旨の指摘があり，特に50代以降の妻の結婚満足度は大変に低い[8]という．夫婦2人の残された結婚期間を男性の平均余命[9]までと仮定すると，夫65歳時において18.9年，夫75歳時点において11.6年である．夫婦で共有する時間を，穏やかで幸せに過ごせるか否かには，結婚満足度が影響するであろう．イギリスにおける縦断研究では，高い結婚満足度は高齢者の健康に良い影響を与えるという報告[10]もある．

結婚満足度を規定するものとしては，先行研究によって多くの要因が報告されている．夫の結婚満足度が高く妻の結婚満足度は低いという性別要因[11,12,13]，家計収入が高いほど結婚満足度が高いという経済要因[6,14]，夫と妻の就労状態によって結婚満足度が左右されるという就労要因[15,16,17]，本人と配偶者が健康であるほど結婚満足度が高いという健康要因[6,14,18]，賃貸住まいの夫婦より持家に住んでいる夫婦の結婚満足度が高いという住宅の所有要因[6]，ライフイベントがポジティブかネガティブかによって結婚満足度に影響を与えるとするライフイベント要因[19]など，多くの環境要因や個人要因が指摘されている．しかし，それらの要因を高齢者が自力で解決することは困難である．例えば性別の変更，家計の大幅増収や借財の解消，疾病の快癒や健康状態の改善など，高齢期においては解決困難な課題が多い．そこで筆者らは，高齢期になっても取り組むことができる結婚満足度改善要因としてエゴグラムに注目した．

［エゴグラム］

心理療法の一種である交流分析（Transactional Analysis）では，人の心にはego-state（自我状態）が存在すると仮定した[20,21,22]．egoは心を構成するとされる仮定概念であり，本能的な衝動や無意識の動きを現実に即して調整する機能を持つとされる[23]．egoの日本語訳は「自我」であるが，「自我」はselfの翻訳語でもあり，広辞苑には3種類の意味[24]が記述されている．本稿で使用する「自我（ego）」の意味を広辞苑に沿って記述すると，「精神分析用語：イドから発する衝動を外界の現実や良心の統制に従わせるような働きをするパーソナリティーの側面．エゴ」である．本稿では，一般的に使用されるエゴイストの略語としての「エゴ」と区別するために，上記の精神分析用語的意味でのegoを英語表記する．

交流分析ではego-stateの機能を，批判的な親（Critical Parent以下，CPと表記），養育的な親（Nurturing Parent以下，NPと表記），大人（Adult以下，Aと表記），自由な子ども（Free Child以下，FCと表記），順応した子ども（Adapted Child以下，ACと表記）の5領域に分類した[25,26]．CPは 親（または親代わり）から取り入れた行動指針のうち，命令や支配を司って，「すべきである」「すべきでない」といった指令を出す．ポジティブなCPは相手を守ろうとする心からの行動であり，ネガティブなCPは相手を非難することに向かう．NPは，親（または親代わり）から取り入れた行動指針のうち，心の愛育的な部分に対応して「愛し慈しむ」指令を出す．ポジティブなNPは親身になっての支援行動となり，ネガティブなNPは過保護やおせっかいな行動となる．Aは社会生活を送る上で必要な事柄について即座に方向性を示すコンピューターのような機能を持つ．FCは，別名Natural Childとも呼ばれ，大人になっても少年少女時代の心そのままに，自由で束縛されない気持ちのままで行動する．一方ACは，大人になった現在でも，親（または親代わり）からの指示や期待に応えようとして，本来の欲求を抑え

て行動する．これら５領域の機能が構成バランスを変えながら対人交流のあらゆる場面を組織しているという考えから，交流分析では「今のego-stateに気付くことによって感情・思考・行動をコントロールする」ことを目的とした治療を行う．そのego-stateを可視化したグラフがエゴグラム（egogram）であり，エゴグラムで計測するものは，その時の心的エネルギーの強さとバランスである．交流分析の考えでは，専門家によるセラピーや自己トレーニングによってego-stateは変容可能である．ego-stateが変われば人は変わり，したがってエゴグラムも変化する[21, 27]．

ego-stateには機能的には5つの領域があり，各領域のエネルギーの強さが，エゴグラムに表示される．従って, ego-stateの５領域とエゴグラムの５領域は同じ意味を持つ．BurneやDusayら交流分析の先人たちは，専門的かつ注意深い観察により直感的にエゴグラムを描いた[28, 29]が，近年，質問紙形式のチェックシート[30]が普及して，精神分析医の手を借りずとも手軽にエゴグラムを描くことが可能になった．質問紙形式によるエゴグラムが日本に紹介されて以来，エゴグラムの利用は，精神科医による交流分析のみならず，社会の様々な場面で対人関係改善[27, 31, 32, 33, 34]に広範囲に使用されている．

ego-stateの自己変容は，自分が高めたい領域を明確にし，それに沿った言葉や行動を増やすように意識することで，個人でも取り組みが可能であることから，結婚満足度改善要因としての可能性を保持している．そこで本研究では，①先行研究において報告された結婚満足要因について検証すると同時に，②エゴグラムと結婚満足度の関連を調べることを目的とした．

2．方法

1）対象と調査方法

定年退職を経て夫婦２人暮らしをしている自宅居住者を対象に，スノーボール形式（筆者の知人を通しての紹介，紹介者を通しての更なる紹介）で回答者を募った．年齢制限をつけると紹介に支障をきたすことから，定年退職経験者という条件を設定した．調査は2009年４月から2009年12月の期間に，原則として筆者が相手先に出向いて対面で行ったが，一部は回答者の都合で郵送回答となった．回答者が同居していることは筆者が面談時に確認したが，婚姻関係は未確認である．年齢や結婚継続年数についても同様であり，確認は行わず，本人の回答をそのまま記録した．倫理的配慮としては，調査に先立ち研究の趣旨を説明すると共に，研究者の責任で匿名性を守ること，データを流出させないことを約束し，同意を得た者にのみ調査を実施した．

2）測定項目

（1）結婚満足度

高齢夫婦の主観的結婚満足感を問うStinettのMarital Need Satisfaction Scale[35]を，袖井が日本人用に修正した尺度[36]を使用した．13項目の設問に「はい」「いいえ」「どちらとも言えな

い」から1つを選択する形式で，合計点の最低は0，最高は26である．数値が低いほど結婚に不満を感じており，数値が高いほど結婚に満足していると考える（表1）．

表1．結婚満足度尺度の質問13項目

1. 私は夫（妻）といると安らいだ気分になれます
2. 夫（妻）は私に思いやりを示してくれます
3. 夫（妻）は私の嫌がることをしないようにしてくれます
4. 私は夫（妻）に何でも気楽に話せます
5. 夫（妻）は，私がこれまで成り遂げてきたことを認めてくれると思います
6. 私と意見が対立するとき，夫（妻）は何かと妥協点を見いだそうと努力してくれます
7. 夫（妻）は，私に何でも気楽に話してくれます
8. 夫（妻）は私の欠点だけでなく長所を認めてくれていると思います
9. 夫（妻）は，毎日の生活を楽しく意味のあるものにするよう協力してくれます
10. 私が何かしようとする時には，夫（妻）はたいてい励ましてくれます
11. 夫（妻）は私が生きがいを見つけられるよう助けてくれます
12. 全体的に見て私は夫（妻）に満足しています
13. もう一度生まれ変わるとしても，同じ人と結婚したいと思います

(2) エゴグラム

日本で広く使用されている東大式エゴグラム・チェックシート（TEG Ⅱ）[30] を使用した．CP，NP，A，FC，ACの各領域に対応する設問がそれぞれ10問あり，「はい」「いいえ」「どちらとも言えない」から1つを選択する形式で，各領域の得点は0から20の範囲を示す．数値が0に近いほど該当する自我領域が未発達かつ不活発であり，数値が20に近いほど該当する自我領域が発達し活発に働いているといえる[25,27]（表2）．

表2．TEG Ⅱの質問内容抜粋（）内は対応するエゴ領域

他人に指図されるより指図する方が多い（CP）
良くないことは指摘する（CP）
人助けをすることに喜びを感じる（NP）
何気ない気配りをする（NP）
他人の話を聞くときに根拠を求める（A）
筋道立てて考える（A）
人を笑わせることが得意である（FC）
つねにその場を楽しむことができる（FC）
優柔不断である（AC）
他人のいうことに左右されやすい（AC）

(3) 主観的健康感

「あなたの健康状態についてお尋ねします」という質問に4つの選択肢を設けた．回答カテゴ

リーと配点は，とても元気４点，ふつうに元気３点，あまり元気でない２点，元気でない１点とし，数値が低いほど自分は不健康だと感じ，数値が高いほど自分は健康だと感じていると考えた.

(4) 主観的家計感

「自由になるお金は充分ですか」という質問に４つの選択肢を設けた．回答カテゴリーと配点は，充分である４点，まあまあ足りている３点，少し不足している２点，不足している１点とし，数値が低いほど金銭的な不足感を感じており，数値が高いほど金銭的な充足感を持っていると考えた.

(5) 就労状況

「（定年退職後も）なんらかの形で就労していますか」という質問に「就労している」，「就労していない」の回答カテゴリーを設けた．「就労している」と回答したケースでは，就労の頻度を聞いた.

(6) 住居の所有状況

「自己所有」と「賃貸」の回答カテゴリーを設けた.

3）分析方法

回答者116人のうち，夫婦の回答が揃った45組90人分のデータを分析対象とした．統計ソフトはSPSS version18を使用し，有意水準は5%未満とした.

3. 結果

1）対象者の属性

対象の年齢は59 − 91歳（67.8 ± 6.3歳），夫69.33 ± 3.8歳；妻66.22 ± 5.4歳であり，夫が妻より年長であった（p<.05）．結婚継続年数は10 − 60年（40.1 ± 8.8年）であった．59歳の妻１名を高齢夫婦に含めるかどうか検討した結果，① 夫が定年退職を経験していること，②子育て終業後の夫婦２人暮らしであることから，分析対象に含めた.

2）結婚満足度

結婚満足度の範囲は5−26（21.3 ± 4.4）であり，夫婦ともに最高点26をつけた満点夫婦は4組であった．結婚満足度と年齢（r=.21，p<.05），および年齢と結婚継続年数（r=.33，p<.01）とに有意な正の相関が見られた．性別結婚満足度は夫10−26（21.7 ± 3.8）；妻5−26（20.8 ± 4.9）であったが，有意差はなかった．夫の結婚満足度と妻の結婚満足度との間には，有意な正の相関が見られた（r=.47，p<.05）.

3）エゴグラム

エゴグラム各領域の結果は以下の通りである（表3）．全体の結婚満足度とエゴグラムとの間には，NP（r=0.40，p<.01），FC（r=0.33，p<.01），A（r=0.22，p<.05）の3領域において，有意な正の相関が見られた．エゴグラム各領域内では, CPと NP（r=.49, p<.01）, CPとA（r=.56, p<.01），CPとFC（r=.36，p<.01），NPとA（r=.38，p<.01），NPとFC（r=.52，p<.01），AとFC（r=.33，p<.01）との間に有意な正の相関が，CPとAC（r=-.30，p<.01），AとAC（r=-.28, p<.01），FCとAC（r=-.36，p<.01）との間に有意な負の相関が見られた．夫群と妻群にわけて分析したエゴグラムでは，A領域において，夫と妻の数値に有意差（p<.01）が見られた．

表3．エゴグラム各領域の平均値と標準偏差

	全体（n=90）	夫（n=45）	妻（n=45）
CP	14.24 ± 3.68	14.91 ± 3.85	13.58 ± 3.41
NP	16.40 ± 3.20	16.69 ± 3.04	16.11 ± 3.37
A	13.00 ± 4.27	14.16 ± 4.43	11.84 ± 3.82
FC	13.90 ± 4.65	14.09 ± 4.49	13.71 ± 4.80
AC	7.37 ± 4.54	7.53 ± 4 .11	7.20 ± 4.97

結婚満足度を中央値（夫22，妻21）で分け高満足群と低満足群を比較した結果（表4），CP（p<0.5），NP（p<0.1），A（p<0.5），FC（p<0.1）の4領域において有意差が見られた．高満足群のego-stateはCP，NP，A，FCの4領域で活発であったが，低満足群のego-stateは，同4領域で不活発であったと解釈できる．

表4．エゴグラム各領域の平均値と標準偏差（結婚満足度高・低別）

	高満足群（n=55）	低満足群（n=35）
結婚満足度	23.98 ± 1.7	17.03 ± 3.9
批判的な親（CP）	15.07 ± 3.4	12.94 ± 3.8
養育的な親（NP）	17.58 ± 2.3	14.54 ± 3.6
大人（A）	13.87 ± 4.2	11.63 ± 4.2
自由な子ども（FC）	15.25 ± 3.7	11.77 ± 5.2
順応した子ども（AC）	6.91 ± 4.6	8.09 ± 4.4

4）主観的健康感

「とても元気」夫40%;妻33%,「まあまあ元気」夫56%;妻65%,「あまり元気でない」夫4%;妻2%,「元気でない」0%であり，全体の97%が自分は健康であると感じていた．結婚満足度と主観的健康感に有意な相関は見られなかった．

5）主観的家計感

「充分である」夫53%;妻42%,「まあまあ足りている」夫36%;妻51%,「少し足りない」夫11%;妻5%,「不足している」夫0%;妻2%であり，全体の91%が金銭的な充足感を持っていた．結婚満足度と主観的家計感に相関は見られなかった．

6）就労状況

「就労している」夫49%;妻25%,「就労していない」夫49%;妻73%,「無回答」夫2%;妻2%であった．夫婦単位での就労状況は，夫婦ともに就労なし18組，夫婦ともに就労あり8組，夫のみ就労あり14組，妻のみ就労あり3組，欠損2組であった．結婚満足度と就労状況に相関は見られなかった．

7）住宅の所有状況

回答者の100%が住まいを所有しており，賃貸住まいは0%であった．

4．考察

1）先行研究結果の検証

先行研究によると，夫の結婚満足度は妻のそれよりも高いという[11, 12, 13]性差が報告されている．本研究においては，夫の結婚満足度は妻のそれより若干高めであったが，有意差はなかった．その背景として，対象妻群の結婚満足度が20.8 ± 4.9と高かったことがあげられる．本調査と同じ尺度を使用した報告[37]では60代妻の平均は17.8 ± 6.1であった．結婚満足度と年齢との間，および年齢と結婚継続年数との間に相関が見られたことは，結婚満足度が一定以上である場合にのみ結婚の継続が可能であることから，当然の結果であると考えられる．

結婚満足度と主観的健康感との相関，結婚満足度と主観的家計感との相関は見られず，それぞれ，「本人や配偶者が健康であるほど結婚満足度は高い」[6, 14, 18]「家計（夫の）収入が高ければ結婚満足度は高い」[6, 14]という先行研究の結果は再現されなかった．その理由としては，本研究の対象の結婚満足度が全体に高く（範囲0−26中，平均21.3），健康な回答者が多く（健康群97%，不健康群3%），経済的困窮者が少数であったことから（充足群91%，不足群9%が），回答者間の差異が少なかったことが考えられる．

就労が結婚満足度に与える影響については諸説あるが，不就労の夫と就労している妻という組み合わせで結婚満足度が下がるという複数の報告[15, 16, 17]がある．本研究では，不就労の夫と就労している妻という組み合わせは45組中3組であり，その結婚満足度の平均は，夫17.3;妻19.3であった．就労状況と結婚満足度との相関は見られなかった．結婚満足度と就労との関係については，高齢者が定年退職後の就労をポジティブに捉えているかネガティブに捉えているかで，結婚満足度への影響が異なることが考えられるため，さらなる聞き取り調査が必要であると考える．

住まいを自己所有している場合の結婚満足度は，賃貸住まいの場合より高いという報告があるが[6]，本調査では，全員が持家住まいであり，比較の対象がないため検証不能であった．

2）結婚満足度とエゴグラムとの関連

表3に示したように，エゴグラム5領域の全てにおいて，夫群の数値は妻群の数値より高かった．対象夫群は，長年に亘る社会生活の対人関係の中で，CP（責任感が強く厳格である），A（理性的・論理的・効率的である），NP（思いやりがある）領域を発達させながらも，FC（活動的で自由奔放）を維持してきたことがうかがわれる．一方，大多数が専業主婦であった対象妻群は，家庭や地域での対人関係を中心として，それぞれのego-stateを発達させてきたと考えられる．A領域において夫と妻の数値に有意差が見られた理由は，Aのプロフィールである「理性的・論理的・効率的である」が会社勤めに必須であることから，大多数が企業に勤務してきた夫群と，大多数が専業主婦であった妻群との，長年にわたるego-stateの発達の差であることが考えられる．

高いNPと高いFCが結婚満足度に貢献していることが明らかになったことは，以下の理由から当然であると考える．NPの高い個人は，人間関係の構築や維持に優れていることから，結果として生活全般に関しての満足度が高くなっていることが考えられる．また高齢期の結婚生活においても，お互いのNPが高いことは，豊かな夫婦間のサポートにつながるため，結婚満足度を高く維持することにつながるであろう．FCの高い個人は，明朗快活で活動的であることから，周囲にとっても魅力的な存在であると言えよう．そのような配偶者の存在が，結婚満足度を高めたと推察することができる．

NPとFCが結婚満足度に貢献することから，低満足群にego-state変容のトレーニング・プログラム[38]を導入することで結婚満足度を改善できる可能性が考えられる．前田[39]は，高いNP（やさしく思いやりがある）と高いFC（自由奔放），そして低いAC（自己主張できる）を持つ高齢者はQOLが高い可能性を指摘している．本研究の結婚満足度調査の結果では，高満足群がこれと類似の結果を示していた．高齢夫婦は，ego-state変容プログラムを介して結婚満足度を高め，同時にQOLを高めることも期待できることが示唆される．

本研究の限界として，サンプルに偏りがあったことがあげられる．結婚満足度の高い対象が多かったが，その第一の理由は，「結婚満足度調査にご協力いただけますか」と依頼すると，結婚に不満を感じている個人は回答を避け，結果として結婚満足度の高い夫婦のみが選択されたことが考えられる．例えば，「結婚満足度調査なんて私には無関係ですから」と逃げ去った妻，「夫は私が何を言っても聞かない人ですから」と苦笑いする妻，筆者が自宅を訪問した直後に外出した妻の様子に，夫婦関係における妻の不満が推測される場面もあった．それらのケースでは妻の回答が得られなかったため分析には含まれていない．今後の調査では，結婚に不満足な夫婦のデータ収集に工夫が必要であろう．第二の理由は，大学の同窓会や企業のOB会を通じて回答者を募ったため，相対的に夫の学歴が高かったと推測されることである．夫群の平均年齢である68歳の当時の大学進学率[40]は13.7%であったことから，当時の希少な高学歴保有

者であった対象は，比較的高い生活レベルを維持できたであろうことが推測できる．全員が住居を自己所有しており，91%が金銭的に充足していると回答したことも，良好な経済状態を裏付けるものと考えられる．

エゴグラムを使用した調査によってego-stateと結婚満足度との相関が見いだされたことは，ego-state変容ためのトレーニング・プログラムを介してNPとFCを活発化することで，結婚満足度を改善する可能性を示唆するものと考えられる．本研究の結果を，トレーニング・プログラムとしていかに実践に移し，高齢夫婦のエゴグラムを改善し，ひいては結婚満足度を向上させることができるかが，今後の課題といえよう．

（註）用語について

結婚についての主観的な評価には，『結婚満足度』『結婚満足感』『夫婦関係満足度』『夫婦関係満足感』『配偶者満足度』『配偶者満足感』『婚姻満足度』『結婚幸福度』『結婚幸福感』などが使用されている．本稿では，袖井の『結婚満足度』尺度を使用したことから，結婚の主観的評価を一貫して『結婚満足度』と表記する．文献に使用された指標や用語は様々であったが，いずれも「結婚生活や配偶者に関しての主観的評価」であることから同一の尺度であると仮定し，用語を『結婚満足度』に統一して記述した．

謝辞

調査にご協力いただいた全ての方々と，ご指導いただいた先生方に，心より御礼申し上げします．

文献

1）稲葉昭英：夫婦関係の発達的変化．現代家族の構造と変容；全国家族調査NFRJ98による計量分析（渡辺秀樹，稲葉昭英，島崎尚子），1，261−275，東京大学出版局，東京（2004）
2）神原文子：夫婦関係満足度をめぐる諸要因に関するレビュー；合衆国における実証研究を中心に．愛知県立大学論集（社会福祉学科編），40:1−25（2004）
3）Mackaey RA，O'Brien BA: Adaptation in Lasting Marriages. Families and Society，80（6）：587−596（1999）
4）Boolwala J，Jacobs J: Age，Marital Process，and Depressed Affect. The Gerontologist，44（3）：328−338（2004）
5）Vaillant CO，Vaillant GE: Is the U-Curve of Marital Satisfaction an Illusion?; A 40-Year Study of Marriage. Journal of Marriage and the Family，55（1）：230−239（1993）
6）永井暁子：結婚生活の経過による妻の夫婦関係満足度の変化．季刊家計経済研究，66:76−81（2005）
7）厚生労働省ホームページ「日本人の離婚率の推移」によると，2005年の統計では，離婚率が高い順に離婚時の妻の年齢は，①30 ～ 35歳，②25 ～ 29歳，③35 ～ 39歳である．離婚率の国際比較においては，離婚率が高い順に①ロシア，②アメリカ，③イギリスと続き，日本は18カ国中13位であった．
8）柏木恵子：結婚の心理学的研究．家族心理学，東京大学出版局，東京（2003）

9） 厚生労働省「簡易平均余命表」平成21年版より
10）Boolwala J: The Role of Marital Quality in Physical Health During Mature Years. Journal of Aging and Health, 17:85−104（2005）.
11）平山順子，柏木恵子：中年期夫婦のコミュニケーション・パターン；夫婦の経済生活および結婚観との関連，発達心理学研究，15（1）：89−100（2004）
12）Heene ED, Buysee A, Van Oost P：Indirect Pathways between Depressive Symptoms and Marital Distress; the Role of Conflict, Communication, Attributions, and Attachment Styles. Family Process, Oxford, 44（4）：413−441（2005）
13）池田政子，伊藤裕子，相良順子：夫婦関係満足度に見るジェンダー差の分析；関係はなぜ維持されるか．家族心理学研究，2:116−127（2005）
14）木下栄二：結婚満足度を規定するもの．現代家族の構造と変容，全国家族調査NFRJ98による計量分析（渡辺秀樹，稲葉昭英，島崎尚子），277−291，東京大学出版局，東京（2004）
15）Lang SS: How Retirement Affects Marriages. Human Ecology, 29（3）：24（2001）
16）Kulik L: Continuity and Discontinuity In Marital Life after Retirement; Life Orientations, Gender Role Identity, Intimacy, and Satisfaction. Families in Society, 88（3）：286−294（1999）
17）Lee G: Marital Satisfaction in Later Life; The Effects of Non marital Roles. Journal of Marriage and the Family.50（3）：775−783（1998）
18）直井道子：高齢者の生きがいと家族．生きがい研究（長寿社会開発センター），10:20−40（2004）
19）下仲順子，中里克治，河合千恵子ほか：中高年期におけるライフイベントとその影響に関する心理学的研究．老年社会科学17（1）：49−56（1995）
20）心理学事典 第4版（有斐閣2001）による自我状態（ego-state）の説明は以下の通りである．交流分析の構造分析は，心の中に親大人子どもの3つの自我状態の存在を仮定し，それによってパーソナリティーの特徴をとらえることを目的としている．
21）ジョン・デュセイ：エゴグラム；ひとめでわかる性格の自己診断．新里里春訳，池見酉次郎監修，創元社，大阪（1980）
22）池見酉次郎，杉田峰康：セルフ・コントロール．6，創元社，大阪（2005）．
23）心理学事典 第4版（有斐閣2001）によるegoの説明は以下の通りである．自我（ego，Ich）認知，感情，行動などの精神諸機能を統制・統合する心的機関，を意味する仮説構成概念である．おもに精神分析学派によって用いられるが，その意味するところは各学者によって若干異なっている．以下略．
24）広辞苑第6版（岩波書店2008）による「自我」の意味は，egoとselfの翻訳語として以下の3種が記載されている．①認識や行為の主体としての私を外界の対象や他者と区別していう語　②意識や行動の主体を指す概念　③精神分析の用語，イドから発する衝動を外界の現実や良心の統制に従わせる働きをするパーソナリティーの側面．本論では③の意味で使用する．
25）新版TEGII解説とエゴグラム・パターン（東京大学医学部心療内科TEG研究会），4，金子書房，東京（2007）
26）中村和子，杉田峰康：わかりやすい交流分析2，5，チーム医療，東京（2007）．
27）新版TEG Ⅱ活用事例集（東京大学医学部心療内科TEG研究会），金子書房，東京（2009）．
28）Burne E: Games People Play; The Psychology of Human Relationship. Grove Press, Inc., New York（1964）
29）Dusay JM：EGOGRAMS; How I See You and You See Me. Harper and Row, Publishers Inc., New York（1977）
30）TEGII（東大式 エゴグラム・チェックシート）の質問紙にはego-state各領域に対応する質問に加えて，信頼性に関する質問3項目が含まれている．

31）奥谷宏行：自分の性格を知りコミュニケーションを見直すエゴグラム；ロールプレイを用いたプロセス分析．精神科看護，日本精神看護技術協会監，32（9）：33−37（2005）
32）福田英徳：生徒一人一人の適正を見いだす；進路指導・生活指導の充実に向けて．新版TEG Ⅱ活用事例集（東京大学医学部心療内科TEG研究会），金子書房，東京，63−71（2009）
33）本間秀明：企業研修で活用する．新版TEG Ⅱ活用事例集（東京大学医学部心療内科TEG研究会），金子書房，東京，55−62（2009）
34）吉内一浩：自己変容のためのアプローチ．新版TEG Ⅱ活用事例集（東京大学医学部心療内科TEG研究会），1，21−24，金子書房，東京（2009）
35）Stinett N, Collins J, Montgomery JE: Marital Need Satisfaction of Older Husbands and Wives, Journal of Marriage and the Family, 33:109−125（1970）
36）袖井孝子，都筑佳代：定年退職後夫婦の結婚満足度.老年社会学，22:63−77（1985）
37）安田かづ子：40代から60代における有配偶者女性の結婚の満足と性の満足．日本性科学雑誌，24（1）：23−32（2006）
38）新版TEG Ⅱ活用事例集には「クスクス笑いの代わりに大きく笑ってみる」など，ego-stateそれぞれの領域を高める言動の具体的な例が紹介されている
39）前田憲弘：人生の質を高める自己のあり方に関する研究；テストバッテリーとしてのTEGII活用．新版TEG Ⅱ活用事例集（東京大学医学部心療内科TEG研究会），1，118−127，金子書房，東京（2009）
40）対象夫群の平均年齢である68歳が，18歳であった当時の大学進学率として，最も近い1960年度の厚生白書による大学進学率を引用した

Ego states and marital satisfaction of Japanese older couples

Tomoko Kusaka
(J. F. Oberlin University)
Hisao Osada
(Graduate School of Gerontology, J. F. Oberlin University)

Keywords：marital satisfaction, older couples, ego states, egogram

The purpose of this study is to investigate the relationship between the ego states and marital satisfaction of Japanese older couples. Researchers introduced TEG (Tokyo University's Egogram Check-Sheet) to evaluate participants ego states which is controllable through training. Participants were approached by snowball method through researchers' networks. Only those who agreed to volunteer did accept the semi-structured interviews and answered the questionnaire. Among them, the data of 90 people (45 couples) were analyzed. Participants were aged 59 to 91 (67.8 ± 6.3) years old, being married for 10 to 60 (40.1 ± 8.8) years, empty nested, and community living. While the Marital Satisfaction (MS) scale ranges zero (least satisfied) to 26 (fully satisfied), husbands' MS was 21.7 ± 3.8 and wives' MS was 20.8 ± 4.9. Marital satisfaction was related to the following three areas of ego states, NP ($r=0.40$, $p<.01$), FC ($r=0.33$, $p<.01$), and A ($r=0.22$, $p<.05$). Since the ego states can be changed through training programs, older couples will be able to improve their marital satisfaction by controlling their ego states.